

あだちから新聞

Vol. 02
winter 2021

20トン。廃棄寸前のデニムを買った

2019年6月ロサンゼルス。とある古着市場で10トンのデニムの塊に出会った。衝撃だった。ショートパンツの製造過程で切り離されたリーバイス501の足の部分。他に買えないらしい。「中学生のときに初めて出会ってからずっと501が好きだから。捨てるのはもったいない」と帰国後すぐ購入を決意。さらに追加で10トン、今度は着用不可能なほど傷み、汚れたデニムを購入した。この廃棄寸前のデニムを生まれ変わらせる自信があった。ヤマサワプレスはアイロン職人の父の技術を生かし、1995年に創業した。服が店頭に並ぶ前の検品やタグ付け、アイロン仕上げなどが本業だ。培ってきた洗浄・補修の技術や人脈があったからこそ、できた。過剰生産、大量廃棄の問題に直面するアパレル業界。コロナ禍の影響も小さくない。同じく苦境に立つ三越伊勢丹の若手バイヤーが山澤社長の思いに強く共感した。共感の輪は次第に広がり、今後は他の百貨店やセレクトショップ、デザイナーらが協業してプロジェクトを展開する予定だ。

株式会社ヤマサワプレス
代表取締役

山澤 亮治 YAMASAWA RYOJI

株式会社ヤマサワプレス

足立区花畑1-8-15

☎ 03-5242-8377

ショップ営業時間/12:00~18:00(火・水・金・日)

①足立区江北 ②46年 ③足立区出身なので
④人情味。荒川の土手。北野武さん ⑤空気がたいなもの



若松湯 店主
五反野駅前通り銀座会 総務部長 **山田 知孝** YAMADA TOMOTAKA

昭和30年から続く歴史ある銭湯を父から継いだのは13年前。深夜に営業を終え、1人で風呂掃除。寝るのは明け方だが、朝9時には開店準備が始まる。そんな過酷な日々にも関わらず、仕事の合間を縫って始めたのが「商店街」と「銭湯」を盛り上げる取り組みだ。高度経済成長期、五反野の商店街は活気があったし、区内の銭湯の数も5倍以上あった。これ以上、商店街が寂れるのも、銭湯が減るのも耐えられない。まずは粘り強く、顔が見える関係を築いた。地道に続けるうち、山田さんに共鳴するように、商店街を、銭湯をおもしろくしたい人たちが集まった。商店街では子どもたちの仮装パレードを行ったり、銭湯では地方農家とつながって、台風被害にあったりんごなどを使った「江戸銭湯香り湯プロジェクト」を展開したり。「まだまだ、もっと変われる」。ひとつの思いが原動力となっている。「自分の店を良くするためには他の店も良くしなきゃだめ。回りまわって返ってくる」。

西新井浴場組合 若松湯
■ 足立区中央本町2-19-11
☎ 03-3886-5230
営業時間/15:00～24:00 金休



「商店街」も「銭湯」も。

①足立区梅島 ②63年 ③出身地から ④下町感。上りのおっちゃんやんと並進に話せる親しみあるまち ⑤おっちゃんばあちゃんが多いのにおいしい



岩風呂の漢方薬湯と軟水の湯が人気の若松湯



商店街の活性化についてみんなで集まり話すのは商店街の喫茶店 絵瑠座



①足立区 ②生まれてからずっと ③出身地 ④助けてくれる人がたくさんいる ⑤温かい人が多い素敵なまち

ママと子どもたちの孤独に寄り添う起業家



子どもたちと開催したワークショップで作ったりぼん



手作りのかわいいベビーアクセサリがぎゅりのT&E JAPAN店内

おせっかい子育てプロジェクト代表理事 T&E JAPAN株式会社 代表取締役 **染谷 江里** SOMEYA ERI

「自分は社会から孤立しているのではないか」。初めての子育てをする中、ふとした瞬間そう感じた。すごくしんどくて、外の世界との関わりがはしくて、ボランティアに応募した。活動を通し地域の人と知り合い、悩みを相談できる人もできた。自分にも社会の役に立てることがあると思えると元気が出た。養護施設の子どもたちが卒園後に孤独感を感じる人が多いという話を聞いて、以前の自分とリンクした。同じように地域とつながることできれば解決できると思った。「おせっかい」かもしれないけど、自分にできることを何かやりたい。施設に向いてワークショップから始めた。出産を機に始めたベビーアクセサリメーカー「T&E JAPAN」の事務所を、区内養護施設「クリスマス・ヴィレッジ」の子どもたちの力も借りて作り、居場所として開放。おずおずと参加した子どもたちが徐々に積極的になり、笑顔を見せるようになる姿や成長を見るのが何よりうれしい。子どもたちが施設を出た後、自立するまで長期的に支援したいと思う。

一般社団法人おせっかい子育てプロジェクト
■ 足立区西新井1-32-11-104
☎ 03-5647-6607



あだちからなひと

vol.2

あだちは「ひと」だと思おう。
ひとが美しいまちを育て、ひとが歴史をつなぐ。
ひとが新しい価値を生み出し、ひとがひとの背中をおす。
ひとが、ひととひとをつなぎ、まちをもっと豊かにする。
「ひと」の物語に触れるたび、あだちというまちの底ぢからを知る。
今日もまた、あだちから一歩をふみだす「あだちからなひと」に出会った。
ほんの小さな一歩が、あだちのちから。



インタビュー
全文はコチラ

あなたの「あだちから」教えて！ プレゼント企画

「あだちから」という言葉には「あだちのちから」と「fromあだち」の2つの意味が込められています。まちへの思い、小さな行動が「あだちのちから」に。家の前に花を植えることも、好きなお店をSNSで紹介したり友達に教えたりすることも「あだちから」です。

紙面に登場した「あだちからなひと」からプレゼント！

私たち『癒し課』に
配属されました

提供：しまや出版

2名

1



千住宿歴史ウォーク
ガイドブック①②セット

提供：千住文化普及会

2名

2



下町3点セット食事券
(文化フライ、藤田焼き、ぼった)

提供：コウケツ

2名

3



カラビナ

提供：足立道具店

2名

4



足立LOVEセット
絵はがき、メモ帳 など

提供：しまや出版

10名

5

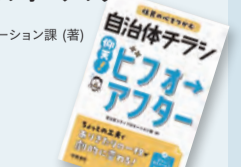


住民の心をつかむ自治体チラシ
仰天！ビフォーアフター

足立区
シティプロモーション課(著)

2名

6



簡単なアンケートに
答えてくださった方の中
から抽選でプレゼント！

応募は
コチラから



締切り:
2022年3月31日



①足立区 ②54年 ③出身 ④ふらふらや(北千住3丁目)のペン ⑤生まれ故郷

ソウルフード「文化フライ」を守る



佐藤さんはコウゲツ2代目。六本木の鉄板焼店で修業し店を継いだ



作っていた人を探して話を聞き、佐藤さんが再現した文化フライ

コウゲツSINCE1978 店長 **佐藤 公彦** SATO KIMIHIKO

“文化フライ”に出会ったのは、小学校低学年のころ。赤門寺(勝専寺)の縁日だった。「美味すぎる!!」。その味が忘れられず「僕が食べたいから」と、店を出すことを決意。しかし母は「うちは駄菓子屋じゃない」と猛反対。それでも、思い出の味、何より“文化フライ”が好きだという熱い思いを母にぶつけ続け、販売までこぎつけた。「今はコロナで客足が遠のき、お酒も提供できない。*みんなで集まって食べる機会がなくなっている。復興なんて大げさなもんじゃないけど、鉄板を囲めるようになったら、文化フライが昔ばなしのきっかけになったらいいね」。親は懐かしさに包まれ、ともに鉄板を囲む子どもたちには美味しいものとして引き継がれる。さらに、“文化フライ”愛好者同士でのオフ会が開かれるなど交流も生んだ。人と人をつないできた“文化フライ”が、コロナを乗り越え、みんなの笑顔をつなぐ日が待ち遠しい。*2021年12月現在は提供している

コウゲツSINCE1978
 足立区千住3-68
 ☎ 03-3870-6074
 営業時間/17:00~23:00
 火休(祝日・祝前日は営業)

読む団地入居者
 フリーランス・システムエンジニア **川上 望** KAWAKAMI NOZOMI

「自分の感じているしんどさは何だろう」。頑張り続けていた前職時代、気づきにくれたのは「本」だった。会社を辞めて栃木の実家にいたとき、「本」がテーマのシェアハウス「読む団地」を知り、入居を決めた。リビングの本棚をポーッと眺めているのが好きだ。書店や図書館で出会わないような本との出会いもあり、子育てをしている女性や高齢者の辛さにも気づいた。若者がその人たちの暮らしを想像しなまま過ごしている。その分断を埋めるのが、自分の役割ではないか。そう思って「読む団地」のコミュニティラウンジ(BOOK MARK)で、コワーキングスペースを開いた。他の入居者がチラシ作りを手伝ってくれ、運営者のJSも協力してくれた。地域の人に来て、喜んでくれた。定期的な開催をめざし、近所の子どもから高齢の方まで気軽に来られる居場所になれたらと考えている。人をまとめることには苦手意識を持っていたが、小さなことからとりあえずやってみよう、今は思う。2年前には想像もしなかった自分がある。

「読む団地」ジェイヴェルデ大谷田
 足立区大谷田1-1 7号棟1F
 運営/JS日本総合住生活(株)



読む団地。本がつなぐ人と人と

①栃木市 ②約2年 ③読む団地入居 ④北千住のメモコロ ⑤日常を暮らすにはちょうどいい町



読む団地は、緑多い中庭に面して建つ大谷田一丁目団地の中にある



読む団地で川上さんが出会い影響を受けた3冊



①伊勢原市 ②4年 ③就職 ④工場が多いところとの職人さん ⑤生み出す拠点

町工場 × デザインでつくる暮らしの道具



カブ・デザインのオフィスで。市橋さん(左)が社長の齋藤善子さん



人気のカラピナ。化粧箱も含めすべて足立区の町工場で作っている

足立道具店 運営 (カブ・デザイン) **市橋 樹人** ICHIHASHI MIKITO

「足立道具店は、製品はもちろんパッケージから何から何までぜんぶ足立でつくってるんです」。足立区には町工場が多い。しかも種類の多さ、多種多様な加工技術を持つ町工場があるのが足立区の特徴だという。足立道具店を運営するのは、デザイン会社「カブ・デザイン」。入社4年目の市橋さんは、妥協を許さない町工場の職人と一緒にモノづくりに挑むのが楽しくて仕方がないという。インターンのころから足立の職人さんにはものすごくかわいがってもらった。今の自分ができることは、ふだんの暮らしの中では見えない職人のすごい技術を、デザインをプラスした製品にして見せること。たとえば足立道具店のドア用フックはシンプルな形も魅力だが、端面(レーザーカットした面)まで徹底して磨く、足立の町工場「福澤製作所」の技があってこそそのデザインだという。製品を見た、モノづくりに携わる人が「足立でつくってみよう」と思ってもらえたらうれしい。今後は、金属や樹脂の製品のほか「革製品や布製品なども」と市橋さんの夢はふくらむ。

足立道具店
 神楽坂のAKOMEYA TOKYO in la kagū,
 KiKi北千住、オンラインストアでも購入できる

株式会社カブ・デザイン(KaB DESIGN INC.)
 足立区栗原1-24-17 福澤製作所2階
 ☎ 03-5831-5861



50代のころ、千住大橋の川床に眠るという伝説の橋杭の「高野槇」を探すため、川に飛び込もうとした。情熱と好奇心あふれる行動が話題となり、NHKの取材を受けたことで、東京都が調査。「高野槇」が見つかった。自宅には、かつての千住大橋の木杭で作った木彫りの像など貴重なものもある。それを幼いころ、ボール遊びで壊し、「エラく怒られた」。歴史や文化に興味はなかったが、近所のおじさんおばさんから「DNAレベルで叩き込まれた」ことが、活動の原点。しかし今、「子どもたちが家にいることが増え、地域との交流が減った」。このままでは、地元千住を誇りに思えず、ひいては自分にも誇りが持てなくなるのでは…。危機感を感じ、15年前、千住文化普及会を立ち上げた。運営受託している「千住街の駅」では、ここ数年、歴史や文化の知識を持った方が訪れることが増え、長年の活動が実を結び始めたと感じる。「過去があるから未来がある。それを次世代に伝えていきたい」。

NPO法人千住文化普及会
 ▲ 足立区千住河原町21-8-702
 ☎ 03-3881-3232



お休み処 千住街の駅
 ▲ 足立区千住3-69(宿場町通り)
 ☎ 080-6630-8037
 営業時間/9:00~17:00 火休(祝日は営業/年末年始休有)



幼少期に壊してしまった木彫りの鍾馭像。今も自宅に大切に飾っている



もと魚屋だった空き店舗を活用した千住街の駅。千住文化普及会が運営

歴史と文化を子どもたちの誇りに

①足立区 ②70年 ③生母も育ちも足立区千住 ④人懐っこいところ。魚河岸 ⑤生まれ育った場所



コミュニティがうまれる花壇ボランティア

①足立区 ②約30年 ③実家があるから ④緑や公園が豊かで住みやすく、素敵なカフェ、家族や友達がいるところ ⑤懐かしさや思い出がある場所



足立区の「ビューティフル・パートナー」として活動している



このごろは近所の子どもたちが手伝ってくれる。右奥が母の静子さん

ひのでかだん 自主管理ボランティア **澁谷 美子** SHIBUYA YOSHIKO

「花壇はたくさんの人に出会え、幸せを感じるサードプレイスなんです」。花壇の手入れを毎日行っている澁谷美子さん(写真右)は話す。近所の方が手伝ってくれたり、苗を交換し合ったり、園児たちがお花の前で歌を歌ってくれたり。若いエネルギーとアイデアで、人と人との交流の芽が生まれている今注目の花壇だ。約7年前、草が生い茂り殺風景だった公園に、「花と緑でキレイな花壇をつくれれば犯罪が減り、子どもたちが安心して遊べるのでは」と母の静子さんが家族で作った花壇。病気を患い、仕事をやめて実家に帰ってきた2年ほど前から一緒に手伝い始めた。花が成長していく楽しさにはまり、母が足腰を痛め他の家族が忙しくなったタイミングで毎日手伝うように。花壇活動に癒され、助けられた。やりがいとなったこの活動を同世代にも伝えたい。WEB制作の仕事の傍ら、手入れだけでなく、スキルを活かしてSNSなどで魅力を伝え、コミュニティを育てるミライの種を蒔き続けている。

日の出公園(ロケット公園)ボランティア花壇
 ひのでかだん
 ▲ 足立区入谷1-3-1



訪れると、6匹の猫が出迎えてくれた。「社員」ならぬ「社猫」として活躍する元野良猫たちだ。「事故に遭ったらかわいそう」と会社の近くにいた野良猫を保護して以来、「癒し課」を立ち上げ、SNS発信を通じて日々世の中に癒しを届ける。今年、社猫たちのフォトブックも販売した。しまや出版は、創業53年目を迎える老舗の同人誌印刷会社だ。14年前、義理の父である先代社長が亡くなり、急遽小早川さんが社長に就任。「印刷も同人誌のこともわからない」…手探りの中、考えついたのは「無知の強みを活かす」ことだった。「初めての人」にも優しい同人誌専門印刷所をコンセプトに、原稿作成のアドバイスや質問への回答など、他社が避ける細やかなサービスで顧客に寄り添う。「宝物を作って納品する」、丁寧な仕事で顧客から大きな信頼を得た。依頼されたものを形にする「技術力」、「顧客を大切に作る心」。そして、アイデアを次々と実現させる「推進力」。小早川社長から、今後も目が離せない。

株式会社 しまや出版
 ▲ 足立区宮城2-10-12
 ☎ 03-5959-4320



初めての人にも優しい同人誌専門印刷所

①千葉県鹿野町 ②14年(在動) ③社長(社長就任)がきっかけ ④経営者の方や足立区ラントでお世話になっている方 ⑤経営者として育ててもらった「恩返し」の街



1階と2階の半分が工場。デザイン、印刷から製本まで一貫生産



癒し課の扉を開けると社猫たちが自由に歩き回って、来る人を癒してくれる

